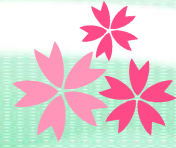


# 紙風船



## アンニョンハセヨ！

### 韓国の子どもたちと笑顔で交流

前々(18)号でお知らせ(予告)した通り、今週の月曜日(23日)に「韓国の小・中学生との交流」を行いました。

交流の案内役は6年生9名。市内の民泊先から9時頃に学校に到着したばかりの韓国の子どもたち(保護者、画家など含んで総勢30名)を笑顔で出迎えさっそく校舎案内。最初に『四季の階段』に案内し“クレヨンでの色塗り”を提案。出会って間もないためか話しかけるのもままならない状態で、色塗りする韓国の子どもたちを後方から見ているだけでしたが、韓国の子どもたちが笑顔で色塗りをしているのを確認し6年生も次第に笑顔が見られるようになりました。続いて『顔出し看板』での写真撮影を提案。ここでも“モナリザ”や“ムンクの叫び”から顔を出し笑顔で写真撮影する韓国の子どもたちや保護者の姿が6年生を笑顔にしていました。



『四季の階段』に色を塗る韓国の子どもたち

交流のメイン活動は、全校児童と韓国の子どもたちとの『紙風船』の色塗り。韓国の子どもたちにも4つのグループに分かれてもらいそれぞれのグループで『紙風船』への色塗りを一緒に行いました。言葉は通じないものの「ここにはこの色を塗ってね」と身振り手振りで伝え、一緒に顔を付き合わせながら笑顔で色塗りする様子がどのグループでも見られました。交流を楽しもうとする姿や積極的に話しかけようとする姿がとても印象的で、とても嬉しい気持ちになりました。



『紙風船』に一緒に色を塗る子どもたち

また、本校の子どもたちの中には「自分(たち)がイメージしている色」と違う色を塗られて嫌な思いを抱いた子もいたようでしたが、それでもすぐにその状況を受け入れ笑顔で話しかけながら一緒に色塗りしている様子を見て、子どもたちの心の成長を垣間見ることができました。「この交流を受け入れて本当によかったな～」と実感した瞬間でもありました。

交流の最後「終わりの会」で、本校からは3年生阿部大和さん、4年生の鈴木千寛さん、5年生の門脇愛実さん、6年生の武藤涼子さんが感想を述べました。その後、5、6年生が作成した『折り鶴』や『ミニ紙風船』などを韓国の方々にプレゼントしたり、記念写真を撮ったりして韓国の子どもたちとお別れしました。



交流の感想を発表するひのきっ子

交流の時間は正味1時間30分程度でした。あっという間に終わってしまい「もっと一緒に交流したかった」などの声が多く聞こえてきましたが、子どもたちにとっては濃密で記憶に残る、貴重な交流となったものと確信しています。この後は、今回の交流で一緒に色塗りした『紙風船』の組み立てや打ち上げの様子を写真に撮り、県を通じて韓国の子どもたちに届ける予定でいます。これを機会に「子どもたちの交流が広がればありがたいな～」と考えています。

なお、今回の韓国の子どもたちとの交流の記事を見た、教育情報誌「職員室」を発行している関係者の方から(住友生命保険相互会社発行)連絡があり、『紙風船』制作について掲載していただくことになりました。

【この交流の様子を取り上げた「ABS秋田放送」のWebサイトに掲載された記事を抜粋して紹介します】

韓国の画家や子どもたちが秋田の文化を体験しました。県のアートプロジェクトの一環で秋田を訪れている韓国からの訪問団が仙北市の小学校で紙風船の色づけなどを行い、児童たちと交流を深めました。仙北市の桧木内小学校を訪れたのは韓国の画家や小中学生など約30人です。桧木内小学校では、学校を美術館に見立てて校舎の至るところにアート作品を展示しています。階段の壁画には韓国の子どもたちが思い思いの色を加えました。桧木内小学校では毎年、地域の伝統行事、上桧木内の紙風船上げに向けて紙風船を制作しています。一行は、桧木内小学校の児童とともに和紙に描かれた今年の干支の酉や、アニメのキャラクターなどに色をつけ、交流を深めました。韓国の小学4年生、カン・ダウォンさんは「壁に画をかいたり、みんなと紙風船の色塗りの体験をして、本当に楽しかったです。それから日本と交流が出来て、いい貴重な体験でした。」桧木内小5年の門脇愛実さんは「紙風船を上げる時はみなさんのことを思い出して上げたいと思います。」韓国人画家のキム・ソニョンさんは「秋田は6回目ですが、こんなに雪が降った日は初めてです。」「帰りたくないくらい素晴らしい景色でした。」と話していました。一行は秋田空港からチャーター便に乗って韓国へ帰りました。桧木内小学校では、来月10日に行われる紙風船上げの様子を撮影して写真を送ることにしています。

## 後記

今号は、「韓国の子どもたちとの交流」の様子の特集号となりました。「反日」で有名な韓国ですが、市民レベルでは「反日」は一切感じられないものでした。今回のような市民レベルでの交流が「反日」の火を下火にするきっかけとなればいいのではないかと感じた今回の交流でした。